若越郷土研究

33の3

# 帰山と呼坂について

小泉義博

## (1)

越前国司藤原為時とともに越前国に来ていた娘の紫式部は、長徳三年（九九七）の晩秋に都に戻るに当たって、次のような歌を詠んでいる。

都の方へとて、かへる山越えけるに、呼坂といふなるところの、わりなき懸け路に、輿も舁きわづらふを、恐ろしと思ふに、猿の、木の葉の中より、いと多く出で来たれば、

猿もなを　遠方人の　声交はせ　われ越しわぶる　たごの呼坂[1]

この『紫式部集』第八一番の歌と詞書は、紫式部がどのような経路をとって都に戻ったのか、つまり当時の北陸道がどこを通っていたのかという関心と共に、多くの研究者に注目されてきた歌であるが、しかし「かへる山」と「呼坂」をどこに比定するかという点では、いくつかの説が提出されていて、いまだに確定的なことは言えない状態である。幸いにこの帰山と呼坂について、いま筆者にはその位置を確定できそうな史料が得られたので、その考え方をここで示しておきたいと思う。

## (2)

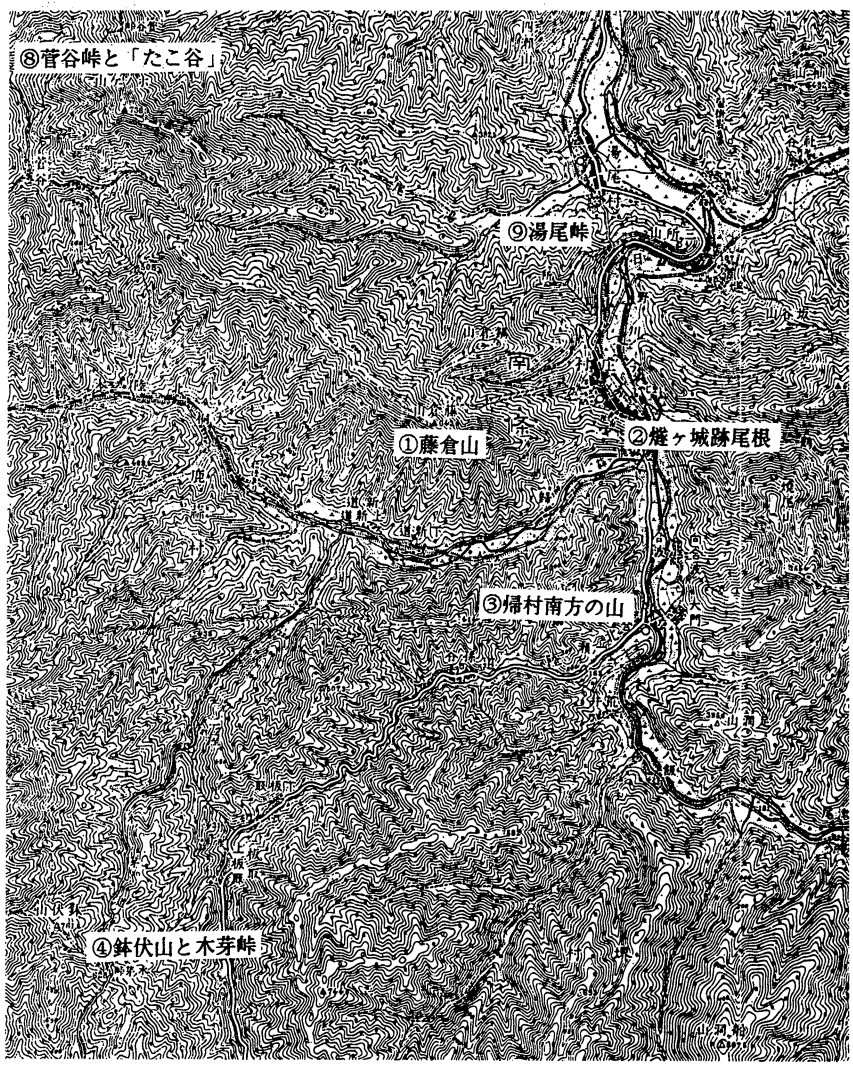
帰山・呼坂をどこに比定するかについて、これまでに提出されている説をまず検討してみよう。

帰山・呼坂の比定地に関する考え方は、『福井県南条郡誌』にほぼすべてが紹介されている。それによると、まず大きく分類して南条郡に所在したという説と、敦賀郡に所在したという説がある。前者の南条郡内に所在したという説のうちには、①帰村の北西の山（藤倉山のこと）を帰山とする、②帰村の北の山（燧ケ城跡の所在する尾根のこと）を帰山とする、③帰村の南の山を帰山とする、④鉢伏山を帰山とし木芽峠を呼坂とする、の四つの考え方があり、後者の敦賀郡内に所在したという説のうちには、⑤五幡の西南の坂を呼坂とする、⑥江良より五幡へ越える坂を呼坂とする、⑦越坂を呼坂とする、の三つの考え方があるという。以上に示された地点を地形図上で示すと、別掲図のようになろう。なお同書では、「二ツ屋を除くの外は鹿蒜山の東麓に散在」という表現が見られて、地元では帰村・新道村の西方、つまり藤倉山の一帯を帰山と呼んでいたことが示されている。

次に、『河野村誌』に示された考え方を⑧説として上げねばならない。これは、河野村大谷の地籍内に所在する字「たこ谷」に注目して、和歌中に詠み込まれた「たごの呼坂」をこの「たこ谷」に比定し、そして紫式部一行の経路については、北陸道を武生市今宿町で右折して大塩谷に向かい、武生市瓜生野町より菅谷峠を経て河野村菅谷に出、さらに山を越えて敦賀市元比田へ抜けたと考える説で

帰山と呼坂の比定地

（大日本帝国陸地測量部、大正２年10月発行）




ある。

これまでの説は以上の八説に尽きると思われるので、次に筆者の見解を述べることにしたい。

(3)

まず帰山について考えてみよう。この地名の現地比定に当たっては、「帰村」という地名が実在し、また地元でも藤倉山一帯を帰山と呼んでいる点が重視されねばならないであろう。帰村は、現在は今庄町南今庄と改称してしまっているが、その集落内には今も鹿蒜神社が所在している。集落や神社が移動したという伝承はないのでという伝承はないので、

古代以来の「帰」は南今庄（旧帰村）と見てよい。なお余談ながら、由緒ある「帰」という地名が捨てられて、今庄の枝村のごとき「南今庄」に近年改称されたことは、いかにも残念なことである。伝統の地名「帰」が持った栄えある歴史を、現代人のつまらぬ語感により棄て去ってしまったわけで、地名としての品格は明らかに落ちたと言わざるを得ない。地名は貴重な歴史的文化財だという点を、我々は認識する必要があろう。

それはともかくとして、実際に所在した帰村を基準にして現地比定を考えれば、〝帰山とは集落帰村に隣接した山である〟という観点が、考察の大前提となるであろう。なんとなれば常識的に考えて、A集落に隣接する山だからこそA山と呼ぶものだからである。A集落より離れた地点、例えば川を隔てた対岸にある山をA山と名付けたり、あるいははるか遠くで見えもしない山をA山と名付けたりは、まずしないものである。とすれば、帰村から離れた位置に帰山比定地を置こうとする③・④・⑤・⑥・⑦・⑧の五つの説には、そもそもの発想法に誤りがあるとしなければならない。

次に呼坂について考えてみよう。第八一番の詞書を見てみると、「かへる山越えけるに、呼坂といふなるところ」とあって、帰山を越える途中に呼坂がある、つまり呼坂は帰山の一部に含まれるという関係である点が注目されよう。しかもこの点については、紫式部が実際に現地を通過した際の表現という、すこぶる高い臨地性を持つものであって、都に生活する人物がはるかな越前の地名を借用して詠んでいるのでは決してない。だから、帰山と呼坂とを切り離して考えるなどの恣意的な解釈はできないのである。この点により③・⑤・⑥・⑦・⑧のような説は不適当なのである。④の説は、帰山と呼坂の関係にのみ注目すれば、一見妥当のごとくに思われるが、しかしこの地点は余りにも帰村から離れていて、不自然と言わざるを得ない。

そこで残された説は、①帰村の北西の山（藤倉山のこと）を帰山とする説と、②帰村の北の山（燧ヶ城跡尾根のこと）を帰山とする説、の二つである。この二つの考え方は、帰村に隣接する山こそが帰山だという常識に合致し、また地元でも藤倉山一帯を帰山と呼んでいるという事実に適合している。しかしこれに呼坂についての前提、すなわち帰山を越える途中に呼坂があるという点を加えて考えてみると、①・②の両説はともに行き詰まってしまうのである。

そこで地形図を見ながらもう一度考え直してみると、そもそも現地で生活する者は、ある特定の地点（例えば山頂や尾根上の一点）を指して「山」と称したりはしないのではなかろうか。それよりもむしろ、樹木が成育し畑が切り開かれ、峠道が隣村まで続いている傾斜地の全体、つまり住居の立ち並ぶ平坦面よりも高い地点は、すべて「山」と称されるものなのではなかろうか。もしそうであるならば、帰山についても同様の理解の仕方をしなければならないのであって、帰村の北側に接してそびえる山塊の全体を指して、帰山と称したと考えねばなるまい。

そこでこのような見方に立ち、かつ道路名称「呼坂」は地形名称「帰山」に含まれるという関係を満たす地点を捜してみるならば、藤倉山からはるかに北東方へ伸びた尾根上の、

八ヶ所山と三ヶ所山との間の鞍部、すなわち通称「湯尾峠」が、呼坂比定地の候補として上がってくることになろう。別掲図に⑨で示した地点である。この考え方は、前述の藤倉山を帰山に比定する①説と基本的には相違しないが、北東方に延びた尾根上の三ヶ所山までを帰山に含めて広く考える点が異なっており、⑨説として提示しておきたいと思う。

もしこの湯尾峠が呼坂に当たるとの考え方が正しければ、第八一番に見られる表現はまことに適切と言えるであろう。すなわち、湯尾を通過して藤倉山の山塊、つまり帰山にさしかかった紫式部の一行は、呼坂（＝湯尾峠）という「わりなき懸け路」のために輿をかくことがすこぶる困難となり、乗っている式部も大変な思いであった。しかもそこで赤く色づいた木の葉の間から猿が出現したと言うのである。「舁きわづらふ」というのは、乗っていた式部が降りて歩いたということを意味するものではなく、乗り心地がすこぶる悪かったというにとどまるものであろう。湯尾峠は、この程度に表現される峠道としてはふさわしい規模のものなのである。

(4)

藤倉山から三ヶ所山まで延びる山塊の全体が帰山に相当し、その尾根上の鞍部、つまり八ヶ所山と三ヶ所山との間の湯尾峠が呼坂に当たるという推測は、はたして妥当なのであろうか。次にはこの点を検証しなければならない。

前述したように、呼坂という道路名称は、帰山のいう地形名称に含まれる関係にある。とすれば、呼坂を指してこれを帰山と呼んでも、一向に差し支えはないはずである。では果たして、呼坂に当たると推測された湯尾峠を指して、帰山と呼ぶ史料があるのであろうか。もしこのような史料が見つかれば、藤倉山から三ヶ所山に至るまでの山塊全体を帰山とみなし、湯尾峠が呼坂に比定できるという考え方の妥当性が、直ちに判明することになろう。

残念ながら、平安期の同時代史料でこの点を示すことは不可能である。しかし戦国末期に下った史料でならば、これを示すことができる。

入敦賀郡気比海辺蜂屋館。出羽守頼隆取刷、尽馳走而已。明、越木目峠、過二屋・板取・新道・今城・帰山・鯖波・脇本、着府中。木村隼人佐構新造、饗上下。[2]

この史料は、天正一三年（一五八五）六月に、羽柴秀吉に命ぜられた長宗我部元親が、越中国の佐々成政を攻撃するために下向した際の記録、「四国御発向並北国御動座事」の一節である。それによると、長宗我部元親の軍勢は、敦賀の蜂屋頼隆の館に一泊した翌日、木目峠を越えて二屋・板取（峠から下る経路が二つあったということであろう）・新道・今城（今庄）と通過し、「帰山」を過ぎ、そして鯖波・脇本を通って府中の木村隼人佐の館に至ったというのである。いま注目すべきは、「帰山」が今庄と鯖波の中間に位置していたと記される点である。これに当たりそうな地点を地形図上に捜し求めれば、別掲図に⑨で示した湯尾峠しか見当たらない。すなわち戦国末期には、湯尾峠は帰山と称されていたのである。

(5)

これまでの検討で得られた結論は、藤倉山

から三ヶ所山に至るまでの山塊全体が帰山に相当し、その鞍部の湯尾峠が呼坂に当たるというものである。考え至ってみればいかにも妥当な比定地で、地元で藤倉山一帯を指して帰山と称している点ともおおむね一致している。これはしかし当然のことであって、紫式部も地元の住人に尋ねたからこそ、帰山と呼坂の地名を知り得たのである。我々が近代的な地形図を広げて、地元の呼称にかかわらず特定の一点を指して帰山に比定しようとしたことが、そもそも無理だったのである。

しかし問題はこれだけにはとどまらない。と言うのは、地形図を知らない江戸期の者ですら、湯尾峠が帰山に属するということをすでに失念していた節が見られるからである。例えば芭蕉『おくのほそ道』には、「鶯の関を過て、湯尾峠を越れば、燧が城、かへるやまに初雁を聞て」[3]と見えて、湯尾峠と帰山は別のものとして記されている。『素良旅日記』[4]においても同様である。それでは、かかる事態が生じたのはなぜであろうか。

理由として考えられるのは、湯尾村・今庄村などの集落が後世に著しく発展したという点である。そもそも帰山という地名は、都に向かって旅する者が、帰村の手前にある山もしくは峠を指して名付けたものである。こうした地名の類例としては塩津山などを上げることができよう。帰村がこの地域の最大の集落として存在した時代はこの命名法で妥当であるが、しかし後世になって今庄村が発展してくれば、今庄村の手前の峠道を指して「帰山」とは言いづらくなる。他方で、湯尾村が発展して湯尾峠に向け集落が延びていき、さらには湯尾村の者が峠道の途中で茶屋を経営する事態になれば、この峠を湯尾峠と呼称するようになるのもやむを得ないであろう。こうした状況の変化にともなって、かつての帰山と呼坂の地名は用いられなくなり、代わって「湯尾峠」が定着していったのではなかろうか。そしてかかる変化は、やはり近世になって交通の大発展を経験してのことだったのではないかと思われる。

最後に、それではなぜここ（湯尾峠）が古くに「呼坂」と称されたのであろうか。この点について一応の考えを示しておきたい。呼坂というからには、呼び掛ける対象があったはずである。それを捜してみると、日野川を隔てて北東方にそびえ立つ杣山こそが、その呼び掛ける対象物だったのではないかと思われる。四九二メートルの杣山は、南から北に向かう旅行者が湯尾峠に登り詰めて眺めると、その右前方に、まさにそびえ立つ感じで視野に入ってくる。この杣山に対して、日野川を隔てた対岸から呼び掛けるところ、それが呼坂だったのではあるまいか。いささか想像が過ぎるようでもあるが、今はこのように考えておきたいと思う。

注1　南波浩氏校注『紫式部集』（『岩波文庫』黄一五―八）。

2　「四国御発向並北国御動座事」（『続群書類従』第二〇輯下）。

3　萩原恭男氏校注『おくのほそ道』（『岩波文庫』黄二〇六―二）。

4　同右書所収。